
少年少女のソノリティ

佐久間 朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女のソノリテイ

【Nコード】

N3897Y

【作者名】

佐久間 朔

【あらすじ】

春からこの狭丘学校に通う事になった俺。バンドやりながら平和に過ごそうと思ったんだけど…衝撃的な出会いをした少女とか親友達とかバンドメンバーを巻き込んで平和どころか落ち着けない学園生活に！皆と騒ぎながらもバンドを続けて行く俺達。笑ったり泣いたり喧嘩しながらも平和な日常を過ごしている。――さあ今日も楽しくおかしくそして真面目に練習そして笑顔でこの日々を送ろう。

新たな始まり（前書き）

前のアカウントを消しての再投稿です。
題名とか色々いじってます。

新たなる始まり

「春。俺―阪上芳樹>さかがみよしきは高校生になった。と言っても半分くらいは地元の友達だったりするからあまり変わり様がない気もするのだが、やはり新しい所は胸が踊る。」

俺の通う学校：狭丘学校。4階建て3棟、温水プール完備、ライブスタジオ完備というなんとまあ公立高校の割にはやたらと設備の良い学校だ。

入学式なので、小学校からの友人 南部幸平>なんべこうへいくとこの学校の入学式に来た。

短髪で容姿端麗どちらかというところ可愛い系か？凄く優しい雰囲気の俺の親友だ。

「やっぱり、新しい学校はいいねえ……」

今縁側にいるおじいちゃんの様なほんわかした表情だ。
これが女子の心を捉えるのか？と思う。

「言っておくけど、芳樹もかっこいいからね？」

「かっこよくはないが……どうやって心の声を読んだ？」

「高校で良い事有るといいねえ……」

「いや、話の話題さりげなく変えないでくれない？」

「あはは…ごめんごめん。でも、ちょっとワクワクしない？」

確かにそうだなと言い返し、何と無く校舎を仰ぎみる。

彼処の3年間でどんな出会いがあつてどんな人と会つてどんな風に過ごすのかな…

「…芳樹、カッコつけてる？」

「今の感傷的な気分返して！」

ポコッと殴つた。幼馴染つてのはいいいけど心の中まで見透かされるから嫌だ。

俺たちは入学式が行われる体育館に入ってきた。ここで一緒にクラス発表も込めてしてしまうらしい。張り紙に貼つて有るクラスの名簿を見てクラス別に座るらしい。

「おい、芳樹くん！幸平くん！こつちだよ！」

ソプラノが響いた様な声がした。隣を見ると幸平が笑顔になつてた。分かりやすい。

「真琴さん！同じクラス？！」

「うん！芳樹くんもだよ！宜しくね？」

「ああ、真琴さん。宜しく」

俺たちが真琴と読んだ女の子…磯部真琴だ。俺の場合は中学からの友人。幸平は幼稚園の時の幼馴染らしい。

150cmぐらいしかない身長。茶髪黒目…この茶髪は地毛らしい。後ろに一本で束ねられてる髪はどこか尻尾に見える。

何処かリスの様な小動物を彷彿させる。目とか完全にリスだしさ…！

で、幸平の好きな人。こんなに分かりやすかったら直ぐに分かるよな。不思議な事に真琴さんはわかってないんだ。

で、真琴さんは幸平の事が好き。前にもバレンタインデーやら何やらで相談されてる。

もう、焦れたい…何かのラブコメを見てるみたいな感じだ。

「でさー……でねー……」

「へー……それってさー……」

あら、見事に二人の世界になって俺は取り残されたよ…

とりあえず入学式が始まるまで寝る事にしますか…

俺が起きると入学式が始まった。後ろにいた金髪のいかにも遊び人みたいな奴に起こされて気づいた。隣は幸平なのだが…まだ真琴

さんと話してらあ…

色恋もいいけど、少しは親友と見ろや。

いろんな思いを混ぜて幸平の足を踏んだ。

叫び声が響いたのはしょうがない。お前が悪い。

始業式が終わると教室に入られ教員が来るまで待機になった。

俺はたまたま隣になった幸平と話していた。

「今日、芳樹の家に行つていい？」

「ああ、いいぞ。でも、散らかつてるからな」

「ああ、ギターね…触らせてくれる？」

「構わんよ」

今出たけど、俺はギターが好きだ。Freedomってバンドにハマつて始めたんだ。

かれこれ2年はやつてるのかな。やるほどハマるから楽しいんだ。

「…寝るから適当に起こしてくれ…」

「ん、分かったよ」

そうして俺は意識を閉ざした。

何か夢を見たが…忘れた。とりあえず、帰って幸平と遊ぼう。

隣にいる幸平に声を掛けて学校を後にした。

新たな始まり（後書き）

感想お待ちします

寝過ぎにはご注意（前書き）

初めは芳樹君の夢です。

寝過ぎにはご注意

何か夢を見た気がする…横には髪の毛の長い少女。

俺は彼女と手を繋いで歩いている。

周りには幸平達がいる。

なんだろう…暖かい…

俺は少女に向かって話しかけてる。

なあ、ほーー

なあに、芳樹

私毛

そしてホワイトアウトして行くー

目覚ましの音が聞こえている。

もう起きなきゃな…

ふと時間を見ると8:00。いつも目覚ましはこの時間だからこのまま寝てても大丈夫かな…

いや、ちょっと待て。今日学校じゃないのか？

ガバッと起き上がり、万能時計で日付と曜日を確認する。 4 / 1 0
木曜日。天気は晴れ、湿度は40%…ヤバイ！

咄嗟に布団から飛び降りようとすると足が纏れ、いい感じに頭から
床と衝突した。痛い…

朝ご飯作らなきゃと思ったけどやめた。適当にブロック食品を食べ
て腹を満たす。

ウチには母親も父親も居ない。

居ないと言うのには語弊があるが、父親は他県で赴任中。

何にも新しい事業の開発で責任者に大抜擢されたとか。

詳しくは知らない。

で、母親の方はその父親を追いかけて行った為、俺は1人寂しくこ
こで暮らす…と。

それが分かったのは高校に受かってからだったから今更受験し直す
のが面倒だった、というのもある。

友人が居るからもある。

さて、部屋をかたして必要な物をエナメルバックに詰め込んで家を
出ると既に8：15過ぎだった。

何に手間取ってたのやら…

今から走って行けば…多分間に合う筈。

と思い、バックを担ぎ直して走り出した。

「ぜえっぜえっ……」

ずっと走り続けるのは酷なのだ。でも10分近く走り続けると思う。でもそのお陰で残すところ学校に着く直線道路だけだ。ここまで来れば多分間に合う筈だ。

少し舐めてた。と言うのも自分のクラスは下駄箱から最も離れた場所にあったのだ。いや、今思い出した。

と言うわけで俺はまた全力疾走。階段とか2段飛ばしです。バックが取り残されない様にギシギシ音を立てて耐えてる。

「そこのお前！危ないから止まれ！」

凜とした声が聞こえた。

上を見てみると黒髪がなびいていた。つか、どんだけ髪なげえんだ！腰まで有るぞ？

これが一瞬の出来事。体は動かずその女子に突っ込んで行った。情けなさすぎる…

「きゃあ！」
「うわっ！」

咄嗟に庇おうとして俺が下敷きになる。床に叩きつけられた瞬間、肺から強制的に二酸化炭素が吐き出された。

「ごほつごほつ…大丈夫か、あんた？」

自分の体の上に覆いかぶさってる少女に話しかける。少女は心配と憤怒が混ざったような顔で見て来た。何と器用な…！

「走ってくるからでしょ！大丈夫、あんた？」

「大丈夫だから…早くどいて」

色々マズイんだ。何がマズイかは想像にお任せします。

少女が退いてくれると急いでたことを思い出した。

「とりあえず、急いでるから…」

キンコーンカーンコーン…

よく聞く学校のチャイムが鳴った。つまりは8：30、HRが始まる時間。

遅刻って事。

俺は少女に早く教室行けよと声を掛けて慌てて教室に入る。

そこには担任の初老の人が居て、頭を出席簿で叩かれた。

初日から遅刻とか最悪だ…！

寝過ぎにはご注意（後書き）

感想お待ちします

楽器仲間は仲が良くなりやすい法則（前書き）

幸平君と真琴さんやらかしてます。

因みに芳樹君はハイスペックな高校生です。

楽器仲間は仲が良くなりやすい法則

「やあ、間に合わなかったねえ……」

「走ったから間に合うと思ったんだけどな」

隣にいる幸平が話掛けてきた為、振り向く。

「何か災難だね。僕が起こしに行つてあげれば良かった？」

「男に起こされる趣味は持ち合わせてねえよ」

やめてくれ、開眼一番こいつの顔とか。生きてる心地がなくなるわ。

「あはは。で、何で遅れたの？今日のテスト勉強？それともギターでもやってたのかな？」

「ああ……ちよつと音のレパートリーを増やしたくてエフェクターをちよつと……え？テスト？」

え、何それ。聞いてないぞ？

「うん、何か新人生テストするつて言つてたよ？」

「え、知らないんだが……」

「いや、しっかり帰りのホームルームで言つてたよ。主要三科目のテスト」

…マジすか。昨日寝てた時か？

「芳樹、爆睡してたからねー」

「いや、起こせよ！」

声を張り上げたため近くの女子がビクッとさせてしまった。誤った所で…

ガラッ！

「をし、テストやるぞ」

もう諦めた。しるか、テストなんて。適当にやって睡眠時間確保したるわ。

「おーい？芳樹？早く顔上げて？」

「…嫌だ」

中学校の復習に近かったからそんなには難しくなかったけどさあ

「…分かるか、幸平？この漢文を現代訳しろなんて？」

「ああ、分からないよねー…あういう問題は嫌いなんだよねー。」

できない仲間を見つけて喜ぶのは性だと思う。で、開き直ると。皆

もするよな…え、しない？

「だよな！無理だよな！」

「うん、それだけできなかった気がするよ」

一瞬でも仲間だと思っただ俺が馬鹿だった。今から制裁を…

「2人で何話してるのかな？」

真琴さんが話しかけてきた。うん、1日ぶり。

「や、やあ真琴」

「よう」

どもりながらも返す幸平と俺。こんなに好意が体面に現れてるのに気づかない真琴さんも凄いものだ。いや、真琴さんも同じ様な感じだけ。

「いや、ちよつとさっきのテストの話をしていたね…それでできなかった問題あったという話なんだけど」

「へえ…そう言えばわたし数学ダメだったなあ…」

「真琴さんは数学？僕は漢文だめだったよ」

「え？そうなの？じゃあさ…」

「えー、何？」

わいわいきゃいきゃい、完全に2人の世界。世界が終るまでは…いや、違うか。

俺の目の前でいちゃつき始めましたよ。真琴は真琴でむっちゃん笑顔だしさ。

「もう、お前ら付き合っちゃえよ。そう俺は思った。いや、誰でも思う筈だ！」

「すげえな、あいつら…あれで付き合ってたねえんだろ？」

ほら、居た！嬉しくなつて振り返ると昨日起こしてくれたチャラチャラした男がいた。確か…

「紗東？」

紗東翔一と自己紹介してたのを思い出す。うん、クラスメイトの名前を頑張つて覚えるのが溶け込む第一のコツ。

「何て、他人行儀な！翔一て呼んでよ！俺も芳樹って呼ぶからさ！」

やっぱ、言う事はチャライなあ…いや、これでチャライとか言つてると小説の登場人物で会った途端に下の名前で読んでくれというのが全てチャラくなるんだけど。

「ほらほら、遠慮しないの！呼んでみ、芳樹？」

俺の沈黙は困つてると解釈されたらしい。まあ、別に読んでも良いんだけどね。

「ああ、宜しくな翔一」

「お、呼んでくれた。宜しく頼むぜ、芳樹！」

友達1人できました。

「そういえばさ、俺ベースやってるんだけど…芳樹は何か楽器やってるの?」

「うん、ギターなら…」

「えっ、マジかよ!一緒にバンド組もうぜ!」

何か結成したのが40歳ぐらいだった有名バンドを彷彿させる様なワードだけど…

「やろうぜ!」

悲しいかな、楽器を持ってる人同志は仲が良くなりやすいんだ。

楽器仲間は仲が良くなりやすい法則（後書き）

感想お待ちします

弁当は暖かいと弁当とは言わない（前書き）

色んな人の小説読んど…何か文字数が少ない様な…

弁当は暖かいと弁当とは言わない

朝、俺はもう遅刻しない様にしっかりと目覚ましをかけて定時に起きてコンビニで昼飯を買って学校に着いた。

教室に入ると幸平と真琴さんが話していた。大方、一緒に登校と言う事だろう。

「あ、おはよー芳樹」

「おはよう、芳樹くん」

「おっす…相変わらず仲がよろしい事で」

軽い皮肉を入れてやった。朝からいちやつかれると満腹感が凄いのだ…逆恨みでは無い、決して。

「やだあ、仲が良いなんて…」

「ねえー」

ダメだ…バカップルにはこんなの効かねえ…

「おっす、芳樹…何、この雰囲気」

肩に手をかけられたから振り返ると翔一がいかにも爽やそうな顔で居た。

「やっば、あいつら付き合ってるんじゃない？」

「俺が知る限り付き合ってるとかは聞いてないぞ？」

「でも…あれ相当年数の経ったカップルの会話だぞ？」

耳をすませば（これが何なのか分かる人は拳手）「明日はおこしてあげる」やら「明日はたまには変わった喫茶店で」だの、聞こえてくる。

「うつわ、本当だ。甘ったるい」

見るに耐えない映像だ。どっかの動画サイトに投稿したらきつと「リア充氏ね」って帰ってくるだろう。ほぼ100%

「で、あいつらどうするの？」

「…ほっとくしかないよ」

中学から同じだから分かるのだが、ああなると止められなくなる。時々グループ学習で同じ様に甘い雰囲気を出してて教師も呆れたぐらいだ。

因みに俺やそれなりに知ってる友人は生暖かい目で見てた。

「じゃあ、ほっとこう。どうせ、止めらん無いんだろう？」

うん、と返しバカップル共を眺める。よく、飽きないね。

HRが始まると流石に甘い雰囲気は無くなった。HRが始まってても雰囲気を出してたのなら本格的に引き離す事を考えた方が良い気がする。

担任曰く、今日から1週間で部活動を決めるらしい。提出用紙やら部活動一覧用紙を渡された。まあ、元々軽音楽部入るつもりだから明日にでも出すかな。

HRが終わると翔一と幸平が俺の所にやってきた。

「翔一と芳樹は軽音楽部だっけ？」

「おう、そうだな。前に翔一とバンドを組む約束をしたしな」

結構軽いノリだったけど、こいつなら何だか行けそうな気がしてきたから…本気でやる事にした。

「んで、幸平は真琴さんとどこに入るんだ？」

「…僕は翔一の中で真琴とどっかに入るのが普通になってるのかな？」

「うん」

「悪いが、俺もそう思う」

「まあ、事実なんだけどね」

マジかよ…部活内であの雰囲気を出したなら…部活崩壊しそうだな…アーメン。別にキリスト教徒と言っわけではありません。

「で、どこに入るんだ？」

「うん、天文学部にでも入ろうかなと」

「へえ、幸平って星とか好きなの？」

いや、俺も知らない。どうなんだ？

「いや、そういうわけじゃ無いんだけど…まあ、真琴が興味あるから入りたくなっただけなんだけどね」

結局、それかよ…と思い溜息をつく。どうにかしてくれ、このカッブル。

初めての授業…昨日やった筈のテストが返却された。何か添削早くなえか？仕事量凄いな。

「うつわ、最悪…」

で、結果は全体的に70点台。流石に凹む。中学生時代は90点連発だったんだが…やっぱ高校の勉強は難しいということだろう。明日からは頑張らねば…

「芳樹！…どうだった？」

「んあ、平均70ぐらい」

すると幸平はびっくりした声で叫んだ。

「凄いね！慌ててきて遅刻したのに…実は勉強してた？」

「いや、全く。つか、これって中学の復習だろ？そんなに難しい訳じゃ…」

「これさ、相当難しい問題集から引っ張ってきてるらしいよ」

…へえ、道理で習ったやり方じゃ解けないわけだ。

「俺、勉強したけど平均30だからな」

と翔一が見せびらかす。

「芳樹はなんやかんや言ってやるよねー。凄いよ…」

と幸平が笑いながら言う。まあ凄いのかな？と適当に流す。

「流すな！俺がいたたまれない！」

ごめん、スルー。

昼食、俺は今朝のコンビニ弁当を広げた。冷めても美味しいのが弁当だと思う。

で、幸平は真琴さんに引たくられてどこかに行った。今は翔一が前の席に座ってる。

「…？お前飯は？」

「いや、もうすぐで来るよ」

何言ってるんだ、こいつはと思うと翔一くんと呼ぶ声がした。

「おう、緋奈…いつもありがとな」

「いえいえ…将来の予行演習ですしね」

小綺麗な人が入ってきた。茶髪に少しフワフワしたような髪。全体

的にお嬢様みたいな雰囲気を出している。ここん所びっくりするのとがたくさんありすぎだ。

「し、翔一。その人誰だ？」

すると翔一は何とも言えない表情を示し、女の子は笑顔になった。たまたま近くを通りかかったクラスメイト（男子）は思わず見入っていた。

「ええとね…こいつはね…」

「翔一君と私は許嫁です！」

へえっ…って許嫁え？！

どうなってる、俺の周りは！

弁当は暖かいと弁当とは言わない（後書き）

好きです、ジブリ映画。

衝撃的（笑劇的）な出会い（前書き）

登場人物が揃いつつあります。

衝撃的（笑劇的）な出会い

「おい、緋奈！芳樹が混乱してるぞ！」

「あらあら…どうしましょう」

うふふつと上品に笑う。

「で？説明してくれんか？」

「…ああ」

翔一が緋奈と呼んだ女の子は銀中央緋奈と言い、翔一の婚約者。

銀中央家は紗東家と親同士が同級生でもし男と女が生まれたら結婚させようと宴会でノリで決められたらしい。

この場合、後悔してるのはどっちやら…

でも、銀中央さんは嫌では無くむしろ翔一と一緒になれる事が嬉しいらしい。なので婚約は破棄されずに残ってる、と。

「これどこの漫画の展開だ！」

「ちょ、芳樹?!」

「あれか?! 幸平といい翔一といい独り身の俺に対する侮辱か?! ちくしょう!!」

「落ち着けー!!」

「はあ…落ち着いたか？」

「うん…」

そりや落ち着くよ。翔一に思いつきり頭から水をぶっかけられたもの。お陰でワイシャツはビショビショだ。今はベランダに干して有る。

ふと周りを気にしてなかったから見てみると俺に同情するような目で見てきてるクラスの女子。

お願いだからそんな目で見な。悲しくなるわ。

「ふう…しかし婚約者ねえ…」

「そんなの昔に滅びたもんだと思ってた」

確か一家の当主が娘を嫁に出すとか前に歴史で学んだ気がする。

「私は滅びてないと思いますよ。現にここにいますから」

と言って翔一にキスをした…てえ？！

「おい、緋奈！何してんだ？！」

「何って、キス」

「そう意味じゃなくて、どうしてここでしてくるんだ！」

ギャーギャーワーワー。クラスからは翔一滅殺計画も練られてるっぽい。本当に殺さねかねん。

その言い争いは次の授業が始まるまで続いた。
出て行く際に銀央さんは

「今夜は全て搾り取って私が母親になるまで付き合ってもらいます
！」

とどう考えたってそっちにしかとらえられないようなセリフを残して消えた。

放課後、部活動見学とやらがあるみたいで翔一に誘われたから行く事にした。

俺としてはさっさと帰って明日にでも部活動参加用紙を提出したいんだけどな。

まあ、雰囲気だけでも味わいに行きますか。

どうやら新人生歓迎ライブとやらやるらしく、俺はそれに行く事にした。

特設プレハブには人で溢れていた。ただ、全員が全員軽音楽部に入るわけでも無いだろう。多分、物珍しいから来たミィハーな人達だと思う。

「うわぁ、スゲえな」

「だから物珍しさに来ただけだつて」

「いや、まだ一回しか言っていないよね?！」

「心の中で言っただわ!」

「知るか!」

まあ時間つぶしになった気がする。

それから程なくしてライブが始まった。全員が静かになる所が凄いなと思った。

「今日は来てくれてありがとう！部長の立川です。最後まで楽しんで行ってくれたらなと思ってます。では、最初のバンド、どうぞ！」

と入場してきて最初の演奏が始まった。会場もみんな乗っている。隣にいる翔一も楽しそうだな。

ライブはプロアマ関係なく一体感が出るから楽しいんだよね。

最後のバンドは部長がボーカルを勤めてるバンドだった。

それなんだが…本当にアマかと言えるレベルでうまかった。リズム陣は安定しながらも自己主張してるしギターもやってるから分かるが慌てる事が無くてゆとりを持って引いてる。ボーカルも伸びが良くて高音も外さない。

それはロック曲でもバラード曲もはずはなかった。

会場が熱狂に包まれる中、俺は完全に魂がそのバンドに奪われていた。

外に出ると俺はまだ体が熱を持っている事に気がついた。相当熱中したのだろう。

「やべえな…あのベースみたか？ステイニングレイだぞ…しかも学生とかのレベル超えてるだろ…」

「凄いよね」

高校の間…あの人達をリスペクトしたい。いつか一緒に…

「いつか一緒に対バンライブできるといいな」

「お、そうだな」

おっと、口に出てきた。

さて…帰るかな。翔一誘うかな。

「あ、あんた！」

「んあ？何だ？」

振り返ると腰まである髪の毛。見事な黒だ。真琴さんや銀央さんは可愛い系だとするとこいつは美人系だろうか。

「おい、この美人さん誰だ？知り合いか？」

いや、知り合いならお前とか言わないだろう？とりあえず言っ事は一つ！

「…誰だ？あんた？」

正直、覚えがない。女の子がガクツとこけた。お、ドリフだ。

「こら！少し前に階段で走るなど注意したでしょ？」

あー…何か居た様な居ない様な…

「…うーん…ああ、あのときの一緒に遅刻した仲間か？」

「仲間じゃないわよ！お陰であの日は遅刻だったんだからね！」

「大丈夫だ、俺も遅刻だ」

「あんたは自業自得だろーが！」

ギャーとか言い始めた。周りがこっちを見てるよ。うるさいからボリューム下げないか？目の前の少女はそれに気づいたのか赤くなつてボリュームを下げてくれた。ほっ…

「…えと…ごめんな？」

こついう時は素直に謝る。それが正しい。巻き添えにしちまったんだしな。

「べ、別に良いわよ」

何か更に赤くなった。きつとあっさりと謝られたから恥かしいのだろう。

「赤尾穂奈美」

「え？」

「私の名前よ。で、あんたは？」

「坂上芳樹だ。気軽に芳樹とでもさかみんとでもよしきんとでも読んでくれ」

「何よ、それ…分かったわ芳樹。私も穂奈美で良いから」

因みにさかみんは俺の中学時代のあだ名な。その頃何かと人の名前を　みんとか呼ぶブームがあつて、さかみんと呼ばれたと。

「穂奈美ちゃん、ここにいたんですか？あら、翔一君に芳樹君」
「おう、緋奈か」

銀央さんだ。つか、銀央って苗字すげえよな、誰だ考えたやつは。

「穂奈美さんと知り合いだったのですか？」

「いんや、俺は今知り合った。芳樹は階段で衝撃的な出会いをしたらしい」

「衝撃も受けたけどね」

誰がうまい事を言えと。

「私、穂奈美さんと同じクラスで初めて話したお友達なのですよ」

「ほうほう…あ、穂奈美？」

「何、芳樹？」

「あんな、銀央さんとそこにいる翔一はな…」

許嫁だと言つとびっくり仰天。俺と全く同じ反応したよ。

俺は気まずくなって顔を逸らし、銀央さんと翔一はニヤニヤ。
分かってない穂奈美は首を傾げていた。

衝撃的（笑劇的）な出会い（後書き）

アクセス数伸びますように（笑）

ミーティング（前書き）

実は… 40話近くストックあります。今はそれを編集して投稿し
できませんがね…

ミーティング

数日後、部活動参加用紙を提出した俺らに軽音楽部から今日ミーティングがあるから集まる通達が来た。多分、顔合わせとかするんだろうな。

「なあなあ芳樹？」

「うん？」

「敵つい奴いるかなあ？」

「日本語使い方おかしくねえ？」

凄いやつに言い換えた方が良かるうに…

「あれ、芳樹達集まり有るの？」

と幸平が話しかけてきた。何かニコニコと上機嫌っぽい。

「らしいぞ、ほれ」

俺は幸平に紙を見せてやる。

「へえ、もう集まるんだ。天文学部なんか来週の月曜日に集まるかららしいよ」

「ありま、案外遅いのね。で？」

「でって？何さ、翔一？」

「真琴さんと入るの？」

ニヤニヤニヤニヤ。真っ赤になる幸平を見て何か完全にゲスっぽい

にやけ顔の翔一。ただ、俺は注意できないぞ？

だって、俺も何かニヤニヤしてんだもん！

天文学部にはごめんだがとりあえず惚気まくって当ててやれ。
そしてまだ見ぬ天文学部よ、アーメン。

放課後、指定された教室に入る。まあ視聴覚室つてやつだ。するともう人が来てたのか20人ぐらいの人が入ってた。

「やつほー、芳樹！紗東くん！」

と呼ばれたから見てみると穂奈美と…あれ、銀央さん？

「おう、二人とも…軽音楽部だな？」

「そうよ、じゃなきゃここに居ないわよ」

「私もそうですよ、翔一君。手取り足取りバンドつてのを教えてく
ださいね」

「あ、ああ…」

何かどもる翔一。

どうにも穂奈美は中学校で合唱団に入ってたらしく歌はそれなりに
は…と言ってた。実際聞いてみないと優劣はつけられないから保留。
そのうち拝聴したいものだ。

で、銀央さんは穂奈美に誘われたらしい。何でもピアノをやってるらしいね。

その手のコンクールに何度も出て賞を取ってるらしい。因みに翔一お墨付き。

「へえ、じゃあ翔一さんとバンドやるの?」

「まあ、そうだな」

「頑張ってくださいね、ライブ絶対に行きますから!」

「うん、そうだね…」

何か翔一の様子が変だ…いや、進化はしないけどね。

「どうした、翔一?」

「……あんな事があつたからまともに緋奈を見らんない」

「はあ?」

何にも…あれだ。男女の契りつてやつを昨晚ずっと翔一が枯れるまでやらされたらしい。そういや、銀央さんいつにまして輝いてるよ
うな…?

いや、気のせいだ。気のせいであると願おう。

「翔一くん…恥ずかしいからあまり人に言わないでください…」

「……」

もうダメだ、こいつらも。

ほど無くして部長と…顧問かな?が入ってきた。

「おうおう、新人生ども…よく来てくれた、ありがとう！」

どんにも部長はフランクな人らしい。前に立ちながらもヘラヘラしてる。

「俺の名前は…いいか。そのうち教えるわ！顧問は…いいよね？」

「いや、一応名乗ろうよ？顧問の古利根です。宜しく」

ぺこりと頭を下げた。礼儀正しい人だと勝手に評価。

「じゃー俺かー…立川でふ」

でふ?! そんなツツコミが思わず声にしまった俺。

「あ、いや…すみません」

「何さー、謝る事ないよー。ツツコミありがと！」

気にせず話し出す部長こと立川先輩。あまり細かい事は気にしない人なのかな。

で、これから1週間かけてバンドを固めるらしい。人数は自由だけど流石に20人まとめて一つのバンドは勘弁してくれと立川先輩から。うん、俺もそれは怖いと思う。

「えと…あんたら経験者か？」

「こいつは昨日だ」

「多分、そっちじゃない。つか、変なこと言うな！」

振り返るとむすっとした男が立ってた。メガネかけてどこか理知的

だ。

「いや… あんたらは何か楽器をやり続けてるのか？ 夜の方ではないからな」

ありやま、何か悟られてらあ。

「一応、俺はギターは3年。翔一は？」

「俺も3年だ、因みにベースな」

すると男は笑みを浮かべた。これ、女泣かせの笑みだな。

「良かった。俺はドラム10年やってるんだ。どうだ、一緒にやらんか？」

「ちよええ?!」

10年だと! って事は… 6歳から?!

「ああ… 親父がドラムやっててそのおこぼれを貰ってな」

「ひよえ… すげえな」

びつくりしてると男の子は改めてこういった。

「で、俺をドラムとしてバンドにいれてくれないか？」

翔一に目配せをするとうんと肯定の意思が帰ってきたので決めた。

「ああ、宜しくな!」

ドラムゲット。後はボーカルだな。
もっと時間がかかると思ってたんだけど…案外あっさりしてた。

ミーティング（後書き）

何かお気に入り登録をしてくれた方が1人…ありがたやありがたや。

頑張りますねー！

これが次は水曜日に更新する予定です。

少年少女の会合（前書き）

さて…元の話より多くなってきました。

少年少女の会合

「お、そうか！俺は遠藤信汰って言っんだ、宜しくな」

「ああ、俺は坂上芳樹」

「んで、俺は紗東翔一な」

簡単な自己紹介を行った。うん、結構行けそうだね。

次の日、俺はバイトしてると言う信汰は置いて翔一とボーカル探しに繰り出した。

「でも、どうやって探すのさ？拡声器使ってボーカルやらんか？とか聞けないだろ？」

「いや、何か前にコンタクト取ってきたボーカルが居たからそいつから当たろうと思う」

「…いつも間に翔一の所に？」

「昨日の後に話したんだ」

どうにもあの後解散した時にもう一人着たそうなの。

「で、会えんの？」

「ん、校門に居るらしい」

「んじゃあ、ま、行くか」

教科書やらノートをバッグに入れる。関係無いが筆箱はいつも置いて帰っている。帰ったってシャーペンぐらいはあるからね。

「うつわ、こいつ教科書持ち帰ってるよ」

「…翔一は持ち帰って無いんか？」

「もち！」

「いや、威張れないからね？」

それよりも早くしようぜと言われたので走った。

さて、どんなやつかな？

校門に行くとなーんか目が細い…狐っぽいのがいた。うん、名前聞くまで狐で行こう、うん。

「おっす、ボーカル志望」

「ちいーす、ボーカル志望でっす」

「ははっ…一応暫定リーダー連れてきたぜ？」

「おお、宜しくな！」

「あ、ああ…」

何だ何だ？何か流される。会話に着いて行けてない。

「で、名前は？」

「えっ…坂上芳樹だ」

「宜しくう！俺は権大寺龍な！」

「あ、宜しく…」

すっげえ名前。純和風やん。親は寺の人か？

「そうだ、言つとくけど俺は寺の人じゃないからな。いつも自己紹介の時に聞かれるんだよなあ」

「へえ…そうなんだ？」

何とも掴みづらいやつだな。

「で、俺は入れてくれんの？」

「ん、ああ。因みにボーカルどんくらいやってる？」

「中学の時にやってたから3年目かな。歌自体は小学校から歌ってるから多分ピッチはハズさねえよ」

「へえ、凄いな。小学校か…」

何かドラムの信汰と言い龍と言いつんでもないのいないか？

「あれ、お揃い？」

すると信汰が下駄箱から出てきた。何かしてたのかな。

「この人ドラムか？」

「そうだね…こいつはボーカル志望の権大寺龍」

「ん、宜しくな。遠藤信汰だ」

「で、これで形になったのか？」

形になりすぎだ。凄いのが集まりやがった。

後日、スタジオに行く事になってこの場は解散になった。

数日後…スタジオの帰り道。あいつら本当凄かった。龍は高音から低音まで安定してるし翔一のベースも良かった。リズムを崩さずにベース以上の働きをしていた。

信汰はタム回しが良かった。高校生からツインペダルとは思わなかったけど…

俺、大丈夫かなあ？翔一は大丈夫だとは言われたけど。あいつらを見てると萎縮しちまう。

「ふう…」

「何、溜息吐いてるの？幸せ逃げるよ？」

「えっ…お前か」

「お前か、じゃない！私は赤尾穂奈美って名前あるよ」

穂奈美に会った。手には…本屋の袋を握ってる。本屋帰りかね。

「で、何で溜息吐いたの？おねーさんに話してみなさい？」

「おねーさんって…同い年だろう？」

確かに知らなきゃおねーさんとやらに見えなくも無いが。

「良いの！良いから話してみなさい？」

「へいへい…えと…」

話してみた。集めた奴らが上手過ぎて着いていけるか心配なこと。居ても平気なのかという事も。

「えと…あんだバカ？」

「バカゆーな！」

これが悩みなんだぞ！しっかりと返事せい！

「えとさ、まだ一回しかやってないのに今からそんなの気にしてたら気が持たないわよ？何度もやってそれでダメだったら練習するなり何なり悩めばいいじゃない。モチベーション下がるわよ？」

「まあ、そうなんだけどさあ……」

それでもやつぱり不安だ。

「うーん……あ！じゃあさ、聞かせてよ！」

「はあ?!」

何言ってるんだ、穂奈美は？

「だからあんたのギター聞かせてよ。とーしろなりに評価するわよ」

「いや、でも弾く場所無いし」

「私の家が有るわよ！」

「男を呼ぶのはマズイだろ？」

「あんたヘタレだから大丈夫！」

「でも……」

「つべこべゆーな！」

「……はい」

押し切られた。これは将来かかあ天下築くね。

……何よ、心配してるほどじゃないわよ。普通に上手いじゃない。

「大丈夫じゃないかしら？」

「でもなあ…何か足りない」

「それなら足りないなりに何かしてみたらどうかしら？」

こればかりは本人しか分からないだろうね。
私には分からないこと。

「ありがとうな。帰るわ」

「あつ…夕飯食べて行きなさいよ」

「え、悪いし良いよ」

「別に気にしないから平気よ。それより、ね？」

どうしてだろう。ドキドキして何か帰って欲しくなかった。

少年少女の会合（後書き）

感想をお待ちします。

カラオケでの惨劇（前書き）

うーん…話が伸びてる…下手すれば120話やりそうです。

カラオケでの惨劇

「…え、来週体育祭？」

朝一番、幸平に体育祭が来週に有る事を聞いた。

「うん、ほら学年通信の日程にも書かれてるよ」

「…知らなかった…」

俺はそういうプリント捨てるからなあ…提出プリント以外捨ててしまつ。それだから中学時代によく失態を犯したんだが…まあ良いや。

「んで…種目決めとかやらの？」

「いやさあ…昨日のHRで今日に決めるって言ってたよね？」

「知らん！」

「えばらないで！」

呆れ顔の親友。ごめん、次からは気をつけるから…

自身は無いがな！

実を言うと体育祭面倒くさい。だって埃っぽいし砂埃凄まじいし暑いし。

「芳樹ー！」

「うん？」

色々考えてると穂奈美が廊下に立ってた。銀央さんも居る。

「よう…翔一呼ぼうか？」

「はい。お願いします」

「おい、翔一！銀央さんだ！」

「あいよ、今行く！」

言い忘れたが今は放課後。朝言ってた体育祭の種目決めはした。すんなり決まったから楽だった。別に司会進行役では無かったが。

「ねえ、駅前のカラオケ行かない？緋奈と話してたんだけどね」

「ん、構わんよ。つか、行かねえと…」

「？何ですか、翔一くん？」

「…ナンデモアリマセン」

成る程、尻に敷かれるとはこういう事か。でも、尻に敷かれた方が生活は安泰らしいな。

「…シクシク」

「ありま」

心に思った事をそのまま口にしたら泣き出す翔一。…すまん。

「で、芳樹はどうする?」

ニコツと振り返ってこちらを見てきた。その表情に目を見開いたけど…ばれてはないよな?

「あ、ああ…うん、行くよ」

「よっしゃ! 因みに真琴たちは行かないから」

へえ、何かあるのかな?

俺は深く考えないで学校を後にした。

で、駅前のカラオケに着いた。平日だからやはり空いてる。

「…はい、4人です。フリータイムで…はい」

今、穂奈美が部屋を取ってるため俺達は少し手持ち無沙汰だ。こういう時って少し暇になるよな。

「…翔一? どうしてそんなに汗が…?」

「いや…お前、緋奈が歌う時に耳塞げ」

「へ、何で?」

いやと言っておきながら翔一は耳打ちをしてきた。内緒ごとってのは鈍く無いし分かる。

「良いから、塞いけ。悪いことは言わねえ」

「何だか知らんが…了解」

とりあえず、翔一の意向に従う事にした。

「ほら、何内緒話してんの？早くしてよ」

「あ、ああ今行く」

いつの間にか取り終えたのだろう。穂奈美は早くしろと言わんばかりに腰に手を当てていた。

カラオケっても歌うものは限られてる。ミーハーな曲は勿論、Freedomの曲を歌う。それなりにCMにタイアップされてるから分かる曲も多いだろう。

と言っても、ロック以外そんなにわからなかったりする。後はクラシックぐらいだが…どう歌えと。

「じゃあ、取った人から歌おうか？」

「え、良いわよ。芳樹歌いなさいよ。最後で良いわよ」

「え、いいよ。翔一は？」

「いや、先に歌ってくれ」

カラオケでよく起こりがちなのは誰が先に歌うか。日本人って遠慮がちだから先を譲ろうとする。…え、そんな事ない？

「しょうがない、じゃんけんにするわよ。勝った人から時計回りね」
「了解」

「最初はグー、じゃんけん…」

翔一が先になった。翔一 俺 穂奈美 銀央さんの順番だ。これで
座席順は想像できるかな？翔一の右隣に俺。翔一の左隣は銀央さん。
銀央さんの左隣は穂奈美…って感じだな。

「じゃあ、行つきまーす！」

翔一が歌い出した…曲は…校歌？！何でカラオケに入ってるんだよ！

「ふう…終わったぜ、はいマイク」

「ああ…てか、何で校歌がカラオケに入ってたんだよ！」

「え、古くからある学校は入ってるらしいよ？」

「なんだと…」

初耳だ。お経が入ってるのは知ってたが…

「それより、ほら」

「へーへー…」

予約してた曲が再生される。うん、カラオケって実際に聞いているの
と音全然違うから分からない時がある。今回もそのパターンだ。
まあ、慣れたけどさあ。

「へー… 芳樹 Freedom 好きなんだ」

「へえ、知ってるんだ」

穂奈美にマイクを渡しながら聞く。

「まあ、それなりにはね。詳しくは知らないわ」

「CD貸してやろうか？」

「そうだね、貸してくれるかしら？」

「明日な」

了解と言うと穂奈美も歌い出した。最近流行りのアイドルグループの曲だ。実はそんなに聞いた事無いから楽しかったりする。あまり流行りには乗りたくないのだ。

「ふう…じゃあ次は緋奈ね」

「はい、頑張ります！」

といい、歌い出す。って、あれ。耳塞いだ方がいいんだっけ？

「¥ 〒×」

「げえ！」

何と言うか、声が高い！マイクがハウリング起こしてる！そして歌詞が聞き取れない！どんな声だ！翔一は耳を塞いでも顔を顰めてる。余裕が無い俺と穂奈美はそんな事をできる余裕がない。

「だから言っただる俺はこのハイハイソプラノが嫌だから耳を塞いって言った訳でだから忠告したのにつて何でお前は腕を掴むお前も巻き添えだつて何でだそんなに力いれんな俺を巻き添えにするなやーめーろっわあああああー！」

とりあえず、癪なんで翔一も巻き添えだ。この瞬間、苦しんでる翔一を見て心から充実感がしたのはきつと気のせいでは有ると願いたい。

そんな体育祭一週間前の出来事であった。

カラオケでの惨劇（後書き）

校歌がカラオケにあるという話ですが…これは昔からある由緒正しい学校だけあるそうです。

全部が全部あるわけではないそう。

まあ、ここではそんなの無視します。

体育祭（前書き）

想像以上に長くなっています。

二つに分ける事にしました。

体育祭

一週間経ち待ちに待たない体育祭の日。

砂埃の立ち込める校庭にイスを持たされ体育着に着替えて頭には青のハチマキ。これがクラスの判別する材料だ。

「さつて…嫌だなあ…」

「いきなり?!」

ツツコミを入れる幸平。それと苦笑をする翔一。

幸平は楽しみですと言わんばかりにニコニコしてる。翔一は…よく分からないけど恐らくワクワクしてるだろう。

「へへ、頑張ろうな」

訂正。こいつもそうとう楽しみにしてる。前日とかは普通だけれども当日にテンションMAXの奴なパターン…いや、無いか。

「はいはい…ビリにならない程度に頑張りますよ」

「一位取ろうよ!」

「ええ…」

テンションが違いすぎる俺たち。

時は過ぎ場所は…過ぎない。さっきまで開会式だったのだ。校長がふざけたおしてコスプレをしてきたのは意外だった。そのおかげで誰か1人倒れたらしい。さっき救急車が搬送してるのを見た。これで中止にならないかと思ったけど続行するらしい。ちっ

「芳樹：お前から黒いオーラ出てるぞ？」

「早くおわらねえかなあ…」

「どうしたの？」

穂奈美か…あいつは赤のリボンだ。つまり敵チーム。赤尾穂奈美だから赤色か。なるほど。

因みにだが、学年毎に三色に別れている。俺たちの学校は6クラスあるので一色につき1学年につき2クラス、計6クラスで一つのチームが作られてる計算だ。

「よう、どうした？」

閑話休題。それよりも穂奈美だ。

「いや、芳樹って行事とか盛り上がらないタイプ？」

「違うけど…今回は異様に盛り上がらないんだ」

とにかく早く終わって欲しいということしか頭にない。

でも、そのうち熱狂して応援してそうで嫌だなあ…何か現金なやつぽくて。

「きつとね、芳樹は照れてはっちゃけられないだけなんだよ」

「おい、幸平。変な事を吹聴するな」

「へえ、そうなんだ」

「ほらそこも理解したような顔しない！」

「ええゝ…」

「ええゝ…じゃない!」

「はにゃー?」

「はにゃー?…違うから!」

招き猫みたいなポーズを取って可愛いとは思わねえ!

「かなち…らのきせ?」

「最早、何言ってるか分からねえよ…」

「そうよ、確か芳樹が何に出るか聞きにきたんだわ」

「え、忘れてたんか?!」

「うん」

さっきの変な応酬は置いといて…確か俺は…

「棒倒しとりレー」

400持久走はどうだか分からないけど棒倒しはメジャーだよな。

「へえ…応援したげるから私は応援合戦と借り物競争出るけど応援ヨロシク!じゃあね!」

「おい、お前は味方応援しろよ!それと…」

「行っちゃったよ?」

はあ……しょうがないそれなりに応援してやるか…

白熱した棒倒しは終わった。何か肘に当たって歯が折れた奴が居るらしく保健室に緊急搬送されてた。俺も…何かテンション上がって

しまった。

そして昼食を取り午後の部。

初めは応援合戦なので穂奈美の勇姿でも見てやるかと思いそれなりにワクワクしながら待っているとチアの服を着た赤組女子たち。穂奈美も居る。

「て、ええ?!」

周りもびっくり。翔一も緋奈さんを見つけてびっくり。幸平は…真琴さんに目潰しされてる。怜悯。

「ちょ、何だよアレは…」

「何でしょうね…」

俺たちはニヤニヤが止まらなかった。女の子達が前で笑顔で踊ってるし服が薄いから……なのでちょっとニヤニヤが止まらない。

すると翔一はいきなり青ざめた。

「どうしたんだ?」

「緋奈が……いや、何でもない」

そこまで言われると気になるのが性だが、震え方が尋常じゃないからスルーする。ギャグではない。

しかし、さつきからどうしても穂奈美を探してしまう。あいつの踊りだけ俺には映えて見えた。

「やあ、芳樹くん」

ニヤニヤニヤニヤ。盛大なニヤけつつらをしながら穂奈美さんが来ました。悪魔にしか見えない俺。

「はい、これ」

手渡されたのはさつき使ってたチアの衣装だ。どうしろと？

「好きにしていいいから預かって！私これから借り物あるから持ってたー！」

「あつ、ちよつとおい！」

行ってしまった。さつきから人の話を聞かない穂奈美。

「俺なら匂い嗅ぐぞ？」

「そんな変態チックな趣味は持ち合わせてないわ」

「それが緋奈のだったら…あ」

翔一の後ろに銀央さん。メアリーさんみたいなフレーズだな。

「そんなに私が欲しいならあげますよ、ほら！」

「ちょまチアの衣装渡すなそしていきなり体育着を脱ぎ出すなさつきのそういみじゃねえからつか芳樹笑ってないで助けるよ幸平逃げるなえ次が出番ならしょうがないつか緋奈泣いてるしあーちくしよっ！」

とりあえず、落ち着け翔一。

グラウンドを見ると借り物競争が始まるところだった。危ない見逃す所だった。入場門から退場門まで対角に走りその途中にある紙にしていされたものをもってくるルールだ。

おっと、スタートの合図だ。

穂奈美は周りと同じくらいに紙に辿り着き指示を見て愕然とした。どんな無茶だったのだろうか？

他の人はそれぞれ指定されたモノを取りに行ってる。

「すみませーん、腕時計ありませんかー？」

とか普通だと思える事や

「彼氏だつてえ？！居るか、ちくしょう！」

あちらではお題は彼氏だそうな。居ない場合どうすれば良いんだろうな。失格？

彼氏が居ないから失格って……不憫…

穂奈美は紙を見て悩んだ顔を見るとこっちに来た。

「芳樹、着いて来て？」

「え、ああ……」

何だか分からないが着いて行く。これって自分のクラスを裏切ってるような感じもするのだが…皆はそこまで考えてないのだろうか？

色々と思案してるうちにゴールに着いた。二着だ。因みに一着はさ

っきの腕時計の人。あれが一番簡単だったらいいからな。

「はい、紙をください」

「え、あ、どうぞ」

紙を役員に手渡す。そいつは普通に紙の内容を読み上げた。

「はい、『一番仲が良い異性』はこの方であってますね？」

「はい」

…ナンダッテ？ナカガイイセイ？仲買制？ちゅうばいせいじゃなくって？そんな制度は無いがな。

「はい、結構です。お疲れ様でした」

「はい…芳樹、帰っていいわよ」

「ちよっ…待てよ」

とりあえず、穂奈美を引き止める。説明を求む！

「さっきのはどういう事だ？！」

「だから言っただじゃない。一番仲が良い異性の人って」

仲買制じゃなくて仲が良い異性。

「じゃあ、ね！」

手を振って穂奈美は帰って行く。一番仲が良いって事は…いや違うか。

頭に浮かんだ煩悩を振り払い次に男子借り物にでる幸平の応援に行

く事にした。

アレ、体育祭楽しんでない？

体育祭の収斂（前書き）

最新話から来た方へ。

前話の続きとなりますので一つ戻ってください。

体育祭の収斂

どうやら男子の借り物競争も同じ様な感じになりそうだ。

さっき女子で使ってた紙をそのままにしてある。つまりは…そういう系の指示が沢山眠ってるのだろう。

あれ、内容によってはゴールできないらしい。恋人が居ないのに恋人とか。

体育祭実行委員が俺らに喧嘩をふっかけてるしか考えられない。

「幸平、頑張れー！」

真琴さんの応援だ。周りが五月蠅いから声援とか聞こえないはずだが…幸平はこつちを振り返り手を振った。

真琴さんがキヤーとか言ってるが俺としてはよく聞こえたなとしか言いようがない。

真琴さん限定地獄耳か？

また考え込んでるうちにスタートしていた。何かどうでもいい事に考え込む事が多くなった気がする。

さて、またお題がハチャメチャらしくタバコ貸せだのビールは無いかだの教師のカツラだの。叫びまくってるからこつちまでただ漏れだ。

幸平はまたしてもこつちにきた。…好きな同性とか勘弁な。ここら一体を薔薇色にしたかねえぞ。

「真琴、着いてきて！」
「はい」

良かった。一部にしか受けられないような展開にならないで。でもお題はなんだろうか？幼馴染？仲が良い異性とか？

「なーんか、ラブラブだなあ……」
「それは周知だ。翔一」

呆れ半分、からかい半分の笑みを浮かべる翔一。どうでもいいが幸平はお姉様方に人気があったりする。曰く、『守ってあげて安心したところを襲いかかりたい！』だそうで。この先輩は……まあそのうち紹介するよ。

ゴールに着くと役員が紙を読み上げてる。
するとこちらからでも認識でぐらいに真っ赤になってた。
どういうのだろうか。気にならない訳が無い。

いきなり泣き出した真琴さんと真っ赤な幸平。異様な光景だ。

「ただいまー！」
「どんなお題だったんだ？！」
「私も気になる！」
「私もですわ！」

どこからか穂奈美と銀央さんが駆けつけてきた。あ、一箇所しかないね。

何か乙女センサーにでもかかったのか。目がキラキラしてる。どこかの少女マンガだ。

「えつとね…『好きな人』だって…」
「うおう！」

変な声をあげてしまった。周りの穂奈美と銀央さん、それとクラスの女子どもはキャーキャー言ってる。いつも忘れてるのだからこいつらまだラバーズじゃないからな。

「ようやく結ばれるね！」
「え、あ、う、うん」
「うわあああああ！」

祝福するクラスメイト。照れる真琴さん。悲鳴を上げるクラス男子一名。あ、幸平もだ。羞恥で悲鳴をあげてるのだろっうな。

「で、幸平？どうするんだ？」
「どうするって？」
「だってよお、ここまでしといて放置するのはどうかと思っぜ？」

口を挟む翔一。俺ら二人は幸平をいじる事にした。観客付きで。

「ああ、うん。…後で屋上に呼び出して有るから」

最後は2人にしか分からないように耳打ちをしてきた。

「そっか。後はお前の言葉で言うだけだ。頑張れよ？」
「うん…」

照れて返事する幸平。この後、さらにラブラブ度が上がるのは言うまでも無いだろう。

とりあえず、他でやってもらう救済措置を取らなければならないと思う。

そして、俺の出番。400mリレーだ。1人100m。俺以外に翔一と陸上部のやつ。

何で陸上部と混ぜるのかと文句を言ったのだが同じぐらいのタイムらしい。因みに早いもの順に並べたので陸上部A 翔一 俺 陸上部Bの順番になる。

陸上部曰く軽くストレッチしたほうが良いらしく、する事にした。

「なあ、芳樹？」

「何だ？」

前に動画サイトで見た手足の深呼吸をしていたところ話しかけられた。あいつは足を下げながら足の上げ下げ運動をしてる。あいつもあの動画見たな。

「何や感や言って体育祭楽しんでるだろ？」

「言っな。数時間前の自分を今ボコボコにしてる最中だから」

怠いとか言いながら楽しんでる俺。所謂、結構単純。

「まあ、最後だし頑張ろうや」

「ああ」

パンツと乾いた音が響いた瞬間、静寂から喧騒になった。

今は陸上部A…？美川ってやつだ。早いのだろうけど…それ以外の奴がいかなせん早い。野球部やらサッカー部が混ざってる。

「おーい、？美川！ラストだあ！」

翔一の大声が聞こえてくる。あいつも張り切ってんなあ…

と呑気に考えてると翔一にバトンが渡ってた。銀央さんに声援でも受けたのか知らないが急激に早くなった。

「おら、翔一。ペース落とすなよ！」

翔一がやった事を俺も真似して見た。俺もそろそろ準備を始める。靴紐は解けてねえな。大丈夫だ。

「ラストお！」

最後の直線。バトンをもらうべく腕を後ろに突き出す。

…今だ！

俺は徐々に走り出しいい感じに加速し出した時にバトンが渡された。

少ししてカーブ。前に1人…後ろには…いや、もう横にいる？！

足が重くなってるのを感じながら離されない様に力を入れる。

「芳樹ー！頑張りなさいー！」

どこからか穂奈美の声援が聞こえる。どうしてか少し楽になって隣の奴を抜かす。

最後の直線。最後は…確か風見だ。早くしろと言わんばかりにチラチラこっちを見てる。

「風見！」

「俺は風鳥だ！」

そんな声が聞こえたがそれどころじゃない。春なのに暑い…

風見がゴールテープを切り喜んでるクラスメイトを見て一位になった事が分かった。

放課後…告白するからと言う幸平を置いて俺と穂奈美は帰ってた。

俺たちは学年二番。全校で8番と言うなかなかな成績だった。楽しかったから良かった。

「お疲れ様。体痛い？」

「そりゃそつだよ…」

全身から悲鳴を上げてる。歩く度に太ももが…

「私が全身隈なくマッサージしてあげようか？アフターケア付きでハートマークがつきそうで妖艶な笑みを浮かべてこっちに迫ってきた。」

「う、そ！」

「ちくしょう！」

こんな感じで俺の体育祭は終わった。

体育祭の収斂（後書き）

体育祭は終了。

でも砂埃って本当に凄いですよね。

風の日とかだったら最悪…

少女の取り扱い注意報

体育祭明けて次の日の午後1時。俺、翔一、龍、真汰で痛い体を引きずってスタジオに行っていた。

真汰はドラムだから体力が必要だと言って毎日走りこみはしてるため筋肉痛にはなっていないが俺と翔一と龍が酷かった。

俺はまず足が痛くて立ってられないためイスを使う。そして何故か腕も痛くて動かし続ける事ができない。

翔一は足が痛い俺と同じ症状のためイスにボスンと座る。

龍は応援で声がガラガラだと。ファルセットが出ないらしい。

なのでやった曲を分割して練習する事にした。

「くっそ、ペダル操作だけで痛いぞ…」

「俺はベースで良かったわ…」

「本当、お前ら体力ねえな」

一つ一つに痛々しい行動をする俺らに呆れ顔の真汰。
くっそ、お前は良いな！

「ねえ、何で俺は立ってるのかなー？」

そう言ってくる龍。イスは二つしか無かったから我先と言っ感じ
でイスを取った結果龍が余った。

「一応、俺も筋肉痛有るからね？」

「さっき言っでなかったじゃん」

喉が痛いしか聞いてないよ。足が痛いなんて一言も聞いてない。

「おし、セッティング終わったし始めるぞー！」

「え、ちよつと！俺、死んじゃう！」

「大丈夫だ！運動部なら普通だから！」

「何なんだよー！！」

知るかという感じに演奏を始めた。右腕も痛えな。手首だけ動かそう。

途中休憩、俺は外にジュースを買いに出ていた。中は飲食禁止なのだ。だから、外に出て飲むしかない。機材とかに零したら賠償金払わねばならんからね。

外でコーラを買いプルタブを引こうとすると手の中から缶が消えた。消えた方向を見ると穂奈美が立ってた。

「何してるんだ？！」

「いや、喉乾いたから」

「自分の買おうぜ？」

穂奈美の手には120円。買ったために出てきたんだな。

「良いじゃない。ケチケチしないでよ…はい、返すわ」

「これって…」

「早く飲まないと気が抜けるわよ？」

いや、飲んだら間接キスじゃね？穂奈美はそんな事を気にしない人なのか？少しドキドキする。

が、気にしない人なら俺も飲んじまう。ごちそうさま。

「はい、私のアクエリも一口あげるわよ」
「…ありがとう」

ドキドキしっぱなしです。異性と物体を閉して接触をしてるのにドキドキしてるわけで別に穂奈美にドキドキはしていない…筈だ。やばい、ゲップでそうだ。うつぶ。

「ふう、生き返る…喉が痛くて歌えないのよ」

「ああ、今日練習だったのね」

「うん、初練習になるのかな？何回か顔は合わせてるんだけどね」

たまたまドッキングしてしまったのだろう。こうしてバンド間で交流が生まれるとなかなか嬉しかったりする。

同じような思考を持っていたり全然世界観が違うやつも居るからな。

「休憩時間終わりだし…戻るな」

「うん、じゃあね。後で」

聞き返したかったが龍に呼ばれたから聞きそびれた。
痛い足を持ち上げてスタジオに入る。

「じゃあ、新しい方練習始めようか」

ただし分けて練習な、と真汰は付け加えた。正直ありがたい。

「おし、じゃあ芳樹の最初のフレーズから入るから翔一は測って入れよー。じゃあ、行くぜー！」

カンカンカン。ドラムスティックでカウントを取り始める。

さつきより腕は不思議と痛くなかった。

スタジオを片付けて外に出る。すると穂奈美がいた。

「マイク買いたいから楽器屋に着いてきて！」

と了承すると近場にある大型ショッピングモールの楽器屋に連れていかれた。

時刻は午後4時50分。4時30分にスタジオから出てきて20分で着いた。

歩いてる間、バンドの事や学校の事を話してた。足に痛みはなかった。

楽器屋に着くとすぐさまマイク売り場に直行。安いから5万円ぐらいまでのを取り扱ってる。

楽器を本格的に買うなら東京に行くしかないが今日は流石に時間がない。

「ねえ、似合う？」

「似合うもなにも使いやすさだぞ」

星とかがペイントされてるマイクを歌う感じに口元に持つてきていた。似合うっちゃ似合う。女性ロック歌手みたいな感じた。

「でもこれ気に入ったなあ……」

「一回歌わせて貰えよ」

「恥ずかしくない？」

恥ずかしいも何も、ギターを買う時も衆人観衆がいるなかで一回は

弾くのだ。

「そんな事を言わずに…すみませーん！」

店員がやってきて一回マイクを試したいの旨を伝えて歌ってもらった事にした。

「これ、何の羞恥プレイよ…」
「わー！ー！」

女の子がそんな事を口にするんじゃないやありません！

ともかく色々あつてマイクは買えた。

「ふふ…ありがとうね」
「ああ…」

どういう訳か、こいつにマイクを買ってあげた。
何でだろうな？

その後、奢ると言つて譲らなかった穂奈美とファミレスで夕飯を取り、帰路につく。

「じゃあね、芳樹。送ってくれてありがとう！」
「ああ、また明日な」
「やだあ、明日は休みよ？」
「え、マジ？」

知らなかった。携帯を開くと土曜日の文字があつた。

「ふふっ、バカねえ。お休み！」

手を振って家に帰って行く。

自宅への帰路がいつもより長く感じた。

少女の取り扱い注意報（後書き）

ファルセット…裏声
です。

龍くんは影ながらの苦勞者です。

勉強会による雑談

季節も夏に突入してもう学期末だ。

学期末…と言う事で定期テストがある。体育祭が中途半端な時期にあつたらしく中間テストはなくなってるらしい。ここ10年くらいそうらしい。中間テストが無い分遊べたし楽しかったのだが…

これ一回で一学期の成績が付く事になる。なので、テストをしくじると夏休み補修コースに強制参加させられる。

教師には悪いがそれだけは断固拒否したいが為に1ヶ月前からコツコツと始めてた。

そして今日。俺は少し寝不足だった。どうにも買ってきたゲームにはまって昼はギターと学業。夜はゲームという不健康極まりない生活を送っており、金曜日から今朝にかけてほとんど寝ていない。多分3時間程度だ。

なので、フラフラ教室に辿り着き速攻爆睡。HRが始まった時に前の席の？美川に叩き起こされた。

テスト二週間前らしく範囲が配られていた。

「ちょっと待てよ！120ページ近く有るぞ?!」

「一学期分のワーク全部やるのかよ!」

阿鼻叫喚…まではいかないが皆いい感じに悲鳴をあげている。
ちよつと優越感。

少し前から勉強はしていた。ワーク類は全て終わらせている。やるの面倒くさいからね。

そうして賑やかで騒がしい朝は過ぎて行った。

2時間目の体育でちょっとした事件があった。バスケをしていたのだが俺はパスされたボールを受け取りそこね顔面強打。急遽保健室に運ばれる事になった。

なので俺は今、保健室のベッドの上だ。クーラーがついてて涼しい。少し目が痛いしクラクラする。多分、寝不足の後遺症か？

あまり考える事はしないで寝る事にする。おやすみ。

気づくと昼食の時間だった。自分の腹は力なく鳴った。

弁当は教室か？と思って上履きを履こうとすると足元に鞆があった。弁当も入ってる。誰か親切なヤツが届けてくれたのだろう。

「おい、坂上！飯食うならこっちに出て来い！」

俺がガサガサしてるのを気づいた妙子先生（妙齡34歳、独身）逆らう要素がないためベッドから出る。うわー、まだフラフラ…

「よう、元気には…なってないな、うん」

元気には…の部分で振り返った妙子先生は俺がフラフラとなってるのを見て苦笑した。

と言うわけで、ご飯タイム。ムシヤムシヤ。こんな時でもお腹空くんだな。

食べ終わるとまだ寝てろと言われたため寝る事にする。昼寝に近いかもな。

おやすみなさーい。

次に目が覚めると既に放課後。一時間ほど過ぎていた。寝過ぎたからか首が痛い。さっきより体調は良くなってるので早々に帰る事にする。

「おや、坂上。帰るのか？」

「はい、今日はちゃんと寝ますよ」

「お前の彼女にでも寝かせてもらえ」

「はあ？」

「さっきから休み時間のたびに見にきてくれてるわよ」

親父っぽい笑みでニヤニヤと見てくる。とりあえず…

「笑い方気持ち悪いですよ」

「まあそつだろうな。で、どこまで行っただ？」

「はあ？だから何の事…？」

すると保健室のドアがバタンと開けられた。

「先生、芳樹目覚めた？」

「あら、彼女来たわよ？」

「…はあ…」

そういう事か。毎回見にくるからそういう関係だと勘違いをした…。そんな事実は一切ない。

「ち、違います。こいつとはそういう関係じゃないです」

「あれ…違うのか？でも、あんどき…」

「違います」

「でも…」

「違　い　ま　す」

「ハイ」

恐ろしいな、穂奈美！

お礼を述べて俺らは保健室を後にする。さて、帰るかな！。

「ねえ、私ずっと見ててあげただけど？」

「何がだ？」

わざとすつとぼける。多分、休み時間の度に来てたと言うのだろう。暇なもんだ。

「だから、私は毎回芳樹の世話に来てたのよ？」

「ほーう、それはありがとう」

「だからさ…」

モジモジ。何かを求めるような顔でこっちを見てくる。何だ、金をくれってか？

「勉強教えてよ！」

色々、予想外だった。

あの後、別に断る要素が無かったから気楽にオツケーと答えてしまった。

そして、後日。勉強会と言う感じで教室に残りやるはずだったんだが…

「…何で幸平と真琴さんも？」

「あら、いいじゃない。多い方が良いわよ」

「うん、そうだね」

「いや、まさか来るとは思ってなかったんだけど」

「…あれかしら、私以外に居ると困るような事をするつもりだったのかしら、この変態」

「何でだよ…」

もう穂奈美はダメだ。ネジが外れかかっている。や、もう外れてるのか？

「とりあえず、始めるわよ！」

「「おー！！」」

俺に拒否権はなさそうだった。幸平と真琴と一緒にすると…考えてくれ。

数刻後、やはりこうなる。

「真琴…当たってる…」

「ワザとだから！それよか次！」

「集中できないんだけど」

「…私から離れたいの？」

「ああ…もう涙ぐまないの。別に良いよ」

「やったあ！」

絶対にこうなると思ってたんだ。穂奈美もげんがりしてる。

「これは…予想外だったわ…」

「だから嫌だったんだ」

ため息をつく穂奈美。

「なあ、親友」

「何かしら？」

ノリで恥ずかしくなりながらも穂奈美を親友と言つと驚いた顔をしながら返事をしてくれた。

「翔一とかは？」

「あー…えつとねえ」

答え辛そうに目を泳がせる穂奈美。

「えつとね、電話した時に…『あら、穂奈美さんですか。え、勉強会？明日？すみません、私は翔一君と人生のお勉強会が…あらあら逃げ出しましたわ。電話切りますわ』って言われたわ」

「……」

「しかも、後ろから翔一が嫌だとかやめるとか」

恐ろしい銀央さん。既に尻に敷かれてる。憐れ、翔一。

「でも、尻に敷かれた方が上手く行くって聞くぞ?」
「あ、それは私も有るわ」

うんうんと頷いているとハツとした顔になりジト目で睨む穂奈美。

「もしかして、あんたも敷かれないタイプ?」

「いや、俺は敷くタイプかな。」

「あら、マゾかと思ったんだけど…」

「…違うがな。俺はいじめる方だな」

「あんた、一生独身でいて」

「何でだよ?!」

呆れ顔で言われると俺泣くぞ!

「だって、あんた奥さんとかにDVしそうだし…」
「しません!」

思わず敬語。

「ふう、そんな事よりさっさと勉強するぞ」
「はいはい」

と言いシャーペンをノックする。隣を見ると…うん。見たくない。

「なあ、あいつら置いておこつ」
「そうね」

あいつらはほっておいて勉強を続けた。

後日談になるが、俺と穂奈美は中々な手応え。幸平と真琴さんはダメだったらしい。

翔一達は…凄く良かったらしい。

何をしてたんだ、あいつら。

Good Afternoon! - - - 1

テスト明け、俺はとても清々しい気分で登校してた。周りを見るとやはりスッキリしたような顔立ちの人や不安そうな顔の人、そして落ち込んでる龍。…って龍？！

「おい、どうしてそんなに落ち込んでるんだ？」

「おお、芳樹グッモーニン」

「Good Afternoon .」

「まだ朝だが…」

これはそんな意味じゃない。とりあえず、辞書引け。

まあ、面倒なので去ろうとすると案の定引きとめられた、チッ。

「今、心で舌打ちしたよね?！」

「いやいや、気のせいですよ」

「うう…まあ良いや」

そこで引き下がるか！まあ良い。

「つーわけでバイバイ」

「ええ、ちよつと！」

「何だよ」

あえて不機嫌そうに返す。意外といじると楽しい龍くん。

「いや、あのな？俺、赤点疑惑なんだよ」

「…マジで？」

「大マジ」

ふうとため息をつく龍。前にも話したが補修の強制参加となる。憐れなり。

「まあ…自業自得だ。頑張れよ」

「…そっぴゃ、うちのクラスの赤尾に勉強教えてたんだってな？」

「うん、それが？」

「他の男子ども羨ましがってたぜ？」

「俺に？穂奈美に？」

「アホンダラ。お前に決まってるあ」

まあ分からなくはないな。あいつと居ると不思議と落ち着くし…甘い匂いするし。

でも、あいつをそういう…恋愛感情？みたいな目で見てないぞ？何回か不意打ちでドキドキさせられたがな。

「ふーん…」

「ふーん…って…まあ、そう言う所気にしないのはお前らしいぢゅーか」

下駄箱に差し掛かるとバイバイと言って靴を履き替える。どうでもいいけど、中3の時に上履きに蜂が潜んでて履いたらグサリ…と刺された事がある。

あれは年甲斐も無く涙を流しそうになった。

後で理科の教員に聞いたんだが、恐らく暖かい所を求めたら上履きにと言うものが有ったから入ったんだろ…だそうだ。

何て傍迷惑な…と思うけど、実際に傍迷惑な存在は人間だろうな。

うだうだと考えながら教室に入った。そっぴゃ、スズメバチ…

「おはよー、芳樹」

「スズメバチ…あ、おはよう」

思わず心で思ってた事を口にしてしまった。よくある…かな？

「何でスズメバチなのかしら？」

「色々とあってスズメバチと言う思考に辿り着いた」

「…元は何を考えてたの？」

「確か、上履きかな」

「「謎だ！」」

幸平と真琴に叫ばれた。話題の転換とか話してるとよくないか？
まあいいやと思つて座席に着く。そーいや、予習してないと思つて
ノートを開く。

「ん？」

何かノートと共に落ちて来た。これは…手紙？
表には何も無い。裏には…果たし状。

「はい、捨てるー」

「つて、芳樹！それラブレターってやつじゃなかったの？！」

「男からのラブレターなんぞいらねえ！」

「あら、そう言う展開が私の友人に…！ああ！」

「真琴さん、完全に腐ってるよね！？」

ちょっと見たくない一面を垣間見た。ぐちょぐちょ系は嫌だからな。

「で、果たし状ってやつに呼ばれなくていいの？」

「やだよ、喧嘩嫌い」

「…ああ、そう」

苦笑する幸平。喧嘩は嫌だ。疲れるし事故処理は大変だし齒は折っちゃダメだし。

それよか予習…と考え果たし状はゴミ箱に投げた。

…おっし、入った。

5時間目の化学は実験だった。期末後だから面白い実験をしようと言う事で、水素イオンと酸化イオンをイオン結合させて水分子を作る実験だ。

一回、中学でもやったな。

今回は大掛かりだ。前はフラスコでやったが今回は透明バケツに入れてやる。電源装置も相当大きいのを持ってきた。

危ないから生徒ではやらせず教師がやるそうだ。と言うわけで俺達は教卓の周りに集まっている。

「はい、ちゅーもく」

少しテンションが上がってる化学の老竹先生。名のとおりヨボヨボ…では無く新任だ。

「じゃあ、誰か起爆してくれんか？」

「先生がしてくれんじゃないんですかー？」

「いや、ここはお前らにやらせてあげようかって」

「じゃあ、俺やりますよ」

と教団に立つ翔一。
心なしか嬉しそうだ。

「おっし、じゃあこのボタンを押してくれよな。皆は耳を閉じろー！」

「俺、片方閉じられなくね？」

「…頑張ってください、翔一くん」

嫌な顔をしてスイッチを握る。そして自分でカウントを始めた。5 . . . 4 . . . 3 . . . 2 . . . 1 . . . ! !

ドカーンとかそう言う音がした。翔一がスイッチを押した途端に轟音がしてバケツの中の水が上に吹き上げてきた。そして、その水は俺にほぼかかった。

「うっわ、冷た！」

「おいおい！」

「つてこら、脱がそうとするな！」

「風邪ひくぞ!？」

それからのはてんやわんや。脱がそうとする翔一、それを写真に納める女子、さっきの爆発音で飛んでくる校長以下。

波乱万丈な化学の時間だった。

はたまた放課後。ようやく乾いたワイシャツに腕を通した。まだ少し冷たい。

「芳樹？」

廊下には穂奈美が。どうしているのかと聞くと

「私、週直だったから」

「へえ」

「それよりどうしてワイシャツ乱れてるの？…まさか…」

「とりあえず、やましい事はないぞ」

「男と…」

「お前もか！お前もそっち側の人間か！」

冗談よ、と返されると早く帰ろうって言われたから片付けのペースを挙げ早々と帰る事にした。

Good Afternoon! - - 1 (後書き)

地味にアクセス数が伸びる事を願います。

Good Afternoon! - - - 2

ちよつと駅前に寄ろうと言われたので穂奈美とよる事にした。

駅前のビル…と言っても殆ど駅ビルなのだがバカにしてはいけない。ここでも基本的に揃うものは揃うのだ。

ファッションしかり雑誌しかりコスメしかり食材しかり。流石に家具は売ってない。

実は前にCDを買いに来たんだが…入り組んで迷った。今考えればこんな所迷わないのにな。

「ねえねえ…化粧品買うから本屋でも居てよ」

「良いのか？」

「うん、見てもつまらないだろうし」

「そんな事はなさそうだが…迷惑になりそうだからやめておくよ。本屋にいるから終わったら何かしらで教えて」

「うん、じゃまたね」

手を振って別れる。コスメは2階、本屋は4階。

エスカレーターでも良いんだが運動不足解消の為階段にしよう。

と二階までは意気込んだのだがやはりバテた。

明日から少しずつやろうと思うね、明日と化け物は出てこないって言うけどさ。

本屋に着くとまずは雑誌コーナー。お気に入りの音楽雑誌があるのだ。

(お、Freedom特集…)

表紙を見ると尊敬してるギタリストのRyoと言うのだがピースしているのが見れる。

まだ若手なのにギター界の期待のエースと言われている。

パラパラめくってみると練習用フレーズと参考DVDが着いていたので買う事にした。帰ったら早速見てみよう。

それだけでは時間が潰せるわけが無いので何となく文庫本を見に行った。夏だからホラー系でも見てみたい。

色々とコーナーをグルグル回っていると目当ての本があった。買うか迷って15分弱。店員にも変な目で見られ始めた気がして来たので買う事にした。

夜にでも読もうかな。

機嫌を良くしながら穂奈美が居ると言われた化粧品店に向かう。メルも来てないし一応本屋をぐるりと回って居なかったから多分まだ選んでいるのだろうと思っていた。

二階に着きある方向に向かうと誰かが男達にちよっかいを出されていた。特に気にせずに通り過ぎようとするどんと隣から衝撃を受けた。

「もうー遅いよ、芳樹。私を虐めるのが好きだからって…」

言っておこう、こいつは穂奈美だ。途中までの会話だとただの恋び…

「おい、どういつ…」

「良いから口裏合わせて」

「ん…」

分からないが合わせる事にする。分からなくてあたふたするような鈍感な神経は持ち合わせてないからな。

「…ごめんな、色々あったんだよ」

「またあの女？」

「あの女って…妹だろ？」

「おい！！」

振り返ると怖い顔の少年達。同い年ぐらいかな？

「順番があるんだから俺たちが先でいいかなー？この子、俺らとデートしてくれるらしいから」

「その後にイイコトも…だよな？」

ああ、よくあるカスイナンパパターンだ。多分、この後に俺は肩でもかけられてビビらせるんだろうな。

そうはいくか…

「ほら、穂奈美」

「え、ちょー！」

グイッと手を取ると一気に駆け出した。Good Afternoon…なんちゃって。

俺の考えだここで諦めてくれる予定だった。ところがどっこい。あいつらは走って追いかけてきやがった。

「こら、待てや！俺らが取ったんだからこっちが先だ！」

ほら、ジャイアニズム！つか、走ってるから考えが無茶苦茶！

「穂奈美、どっちに逃げたら巻ける？！」

「えっあ…次はこっちから入るよ！」

次は穂奈美が先導する。行き先的に…電車のホームか！？

電光掲示板を見ると後1分も満たないぐらいで来そうだ。俺は慌ててPastoを取り出し改札をぐり抜けた。後ろを見るとあいつらもぐり抜けてきた。

「しつこいのは嫌いよ！」

「ナマ行つてんじゃねえ！さっさと俺らに奉仕しやがれ！」

それが本音かよ…走りながらも少し呆れてしまった。

ホームしたの階段に着くと人が溢れかえっていた。多分、電車が付いたのだろう。

人に流されない様に手を強く握り駆け上った。後ろからは罵声やら怒鳴り声やら、少しでも止まったら捕まりそうだ。

どうにかホームに着くともう待つてゐる人は乗っていた。慌てて飛び乗って穂奈美が乗った瞬間に後ろでドアがしまった。

…ギリギリセーフ…

少し安心して力が抜けた。ここまでしつこい奴は始めてみた。

「ふふっ、芳樹かつこよかったよ。逃げたのはどうかと思うけど…」

「あそこで俺に殴り合いでもしろと？」

「うん、結構期待してたんだねどね」

「…やめてくれ」

喧嘩は嫌いなのだ。

次の駅で折り返して戻ってきた。さっきの奴らはもう居ない。

「居ないわよね…?」

「うん、大丈夫そうだな」

「びっくりしたわー」

「君が美人だからじゃないかなー?」

「…目を見て言おうよ」

ふざけて言ってるから！決して恥ずかしいわけじゃないから！

「まあ良いわ、帰ろ?」

「うん…あ」

今頃気がついた。手を握っている。握る部分が暑い。汗がじんわりと…

「うわあー!!」

「どうしたの?!」

ニヤニヤ。真っ赤になる俺を見て悪い笑みと言うか妖艶な笑みと言うか。こいつ気づいていたな…!

「あらあ、芳樹。以外と初心ねえ」

「やめてください」

恥ずかしくなつてさっさと歩いて帰る事にした。

Good Afternoon! - - 3 (前書き)

長い…かな？

Good Afternoon! - - - 3

次の日、寝たのが10時ごろだったから目が覚めたのは5時だった。いつも朝は目覚めたとしてもうだうだしてたりして…まあ朝が弱いわけだ。

お目々ぱっちりと言うわけだから少し部屋の清掃を始めた。俺が住んでるのは一軒家…だけど親はいない。いないっと言うのも親父が出張して母さんがそれに着いて行った。俺は高校に受かってもう一度受験し直す気などさらさらなかったのでここに残る事にした。

まあ1人暮らしは憧れるが楽なものではない。光熱費とか税金やらなんやらは親が支払ってるのだが食費とかは自分で賄ってる。だから正直面倒だ。自分で家計簿をつけているようなものだ。

部屋の片付けをしてると携帯が振動していた。サブディスクを見ると赤尾穂奈美の名前。開いて見てみると

『おはよう、一緒に行きたいから…そうね8丁目のコンビニに7:30に来てくれるかしら?』

どうやら一緒に登校しようというお誘いメールだった。どうして誘ってくるのかとか何で俺なんだとか色々聞きたい…けど、そこに断る要素は見当たらないので簡潔に『了解』と送った。

携帯は忘れないようにかけてある制服のポケットに突っ込む。どうにも携帯は忘れる事が多いのだ。多分、あまり重視してないからだろうね。

下に降りてリビングに入る。朝食は軽めに食パン一枚それと命の水

オレンジジュース。愛媛の心が大好きなんだ。みかんみかんみかん、みかん。

TVをつけて爽やかそうな司会がニュースを読み上げて次の記事に移ろうとしたときにパンが焼けた。

オーブンから取り出して頬張る。

…うげっ、少し生焼けだった……もう一度焼き直す。その間にオレンジジュースを飲む。ぷはー、えめえ。

チンと甲高い音がしてパンを取って食べると良い感じにサクツとしてた。

食べ終えて時計を見ると7時を少し回っていた。8丁目のコンビニは大体10分ぐらいだからもう少しのんびりしよう。

TVに意識を向けると本日の占いとやらがやってた。特に占いとかは気にしない質だからいつもは見ないんだが何となく見る気になった。8月2日生まれだから獅子座だ。

「獅子座のあなたは本日はちょっとしたトラブルに巻き込まれるでしょう。ただ、そのトラブルの中にちょっとしたハプニングで嬉しい事があるかも?! ラッキーカラーは黒です! 続いて乙女座のあなた…」

ハプニングねえ…車に突っ込まれるとか? いや、コンビ二強盗、神様が狼に乗って突進…非現実的すぎるか。非現実を求める柁木くんじゃないんだから…

うだうだしていると鞆にノートやら突っ込んでないのに気づいたので自室に戻り鞆に突っ込んだ。今日は主要5科目あるから重くなってる。時間割を考えた担任を殴りたい。

戸締りをしてガスの元栓を確認して家を出た。多分、ちょうど良いくらいにコンビニに着くぐらいかな。

夏にしてはまだ涼しい朝の住宅街を歩く。

ちよつとすると呼び出したあの子は雑誌を立ち読みしてた。表紙から見るとファッション雑誌当たりだろう。

しばらく見てるとようやく穂奈美も気がついた。

「よう、ねーちゃん。俺と一緒に学校行かねーか？」

「ふふ、そうね。学校に行く間私を守ってくれるナイトならお願いするわ」

「そりゃ光栄だ」

軽口は軽口で返される。多分、昨日の事があったから保身のために呼んだのだろうか？

まあ昨日の奴はしつこかった。流石に学校まで追いかけてはこないだろうけど…念のためだ。

「では、向かいましょうかお嬢様？」

「宜しくてよ」

主従関係がこの瞬間だけ成り立った。しかし、数秒後崩される。

「…やっぱ、芳樹その顔最高…あははっ！」

笑出しやがった。何か真面目(?)にナイトを演じたのに損した気分だ。

「…いつまで笑うんだよう…」

ついには腹を抱えて笑いだした。俺は少し涙目。周りの人は特異な俺達を見て変な目で見ている。

「あははっ…もう笑わな…ぷくく…」

「笑ってるだろ?!」

「だって、真面目な顔で…くくっ…おかしい事を言うんだもん」

「置いてくぞ、お転婆姫」

「くくっ…私を置いて行くの?音楽家ナイト様?」

暑さで少し俺らの頭がイかれてるようだ。さつさと学校で涼むとしよう。

昼休み、俺は暑さで茹だってた。近くの高校だとクーラー完備なのだがウチは職員室、保健室、図書室、体育教官室にしかない。体育教官室に着いているのは炎天下の中体育教師は何度も直射日光を浴びるから熱中症にならないように…らしい。

「よう…芳樹。抱きついていいか?」

「むさ苦しいからやめてくれ…」

翔一はパタパタ下敷きを仰いでる。少し風がこっちにきて涼しい。そーいや地球温暖化って周期的に起こってるらしいねー。二酸化炭素が原因じゃなかったらそのうち寒い地球寒冷化するかもねー…と翔一に言つと「頭がショートするっ…」とか言つて倒れた。ああ…扇風機…

「やつほー、芳樹…あれ死んでる。みんなも?」

みんなつてのは幸平、真琴さん、翔一を混ぜての事だろう。幸平はワイシャツをズボンから出して真琴さんはボタンを開けてるのだから色っぽい。多分、幸平へのアピールだろうが回りの視線を確保して幸平は見向きもしてない。翔一は言わずもがな。

「そんな君たちに冷えたジュースはいかが？」
「……え？」

穂奈美の手元を見るとジュース。わざわざ校内から抜け出して買ってきてくれただろう。

「ありがとな……ふう、生き返る」

喉を通る感覚が気持ちいい。回りの面々も目に活気が戻った。飲み終えて昼休みが残り5分になった時に事件が起きた。

「ねえ、ニュース！他校の人間が校内に侵入したって！」
「ええ?!」

持ってきたのは委員長の長谷川さん反応したのは？美川くん。侵入者ってどう言う事だ？

「何にも人探らしいよ」
「へえ……ま、俺らには関係ないか」
「そうだな。あー、翔一下敷き半分くれえ……」
「これを割れと?!」

いつも通りに戻れるはずだったが戻れなかった。

「はい、失礼するぜえ……さって居るかなあ……」

体をビクツとしてしまった。昨日追いかけてきた奴らだ。ここまで追いかけて来たのか…？制服から学校を暴いたんだろ…

（バレるかなあ…？）

（多分…）

がつつり顔を見られてる。多分、つつかかれるだろう。

「はい、次はっ…いたいた〜。昨日の子だぁ！」

「ははっ、居たなぁ！」

ニヤニヤと近寄ってくる2人。ふと様子を見ると廊下には後3人は居る。厄介だなあ…

「ねえ、俺たちあの後女の子探すの大変だったんだよぉ？」

「そうだぜえ、歩いてる奴に学校を優しく聞いてなあ…フレンドリに教えてくれたぜ？」

「だからさあ…俺達と来いよ。このダメそうな彼氏より満足させられるぜえ？」

「後、そのワイシャツをはだけさせてる女もだ。不満なんだろう？俺達が解消してやるからよ！」

「その代わり壊れちまうかもしれないけどね！」

「くはははっ！」

何か不良高校にありそうなセリフを聞かされて笑いそうになる。翔一は必死に笑いを堪えてる。

「だからさあ…その彼氏どもも来いよ。一緒にしようぜ？」

「悪いけど、嫌よー！」

どうやってご帰宅願おうかと思ってる。と穂奈美が声を張り上げた。幸平はビツクリしてる。

「最高の彼氏を裏切ってあなた達の所に行きたくないわ！帰って！」

ちよっ！俺、あんたとそんな…！

「…ああん？」

すると腕を振りかぶるモーションが見えたので思考を中断して咄嗟に間に入る。

…ぐっ！

思いつきり腹を殴られた。さっき食べたものが出そうになるがこらえる。その時になってようやく現実が追いついたらしく回りからは慌ただしく動き始める。外にいた奴らも中に入ってきた。これって… 1：6？

「良い気になつてんじゃねえ！俺らは親切で下手に出てやってるのに何だその態度は！いいからさっさと来やがれ！お前もだ！」

「やめて！」

「いやっ！」

グイッと穂奈美と真琴さんを引っ張る。すると引っ張りすぎたのか穂奈美のワイシャツがビリリと裂け始めた。

「いやあ！」

黒い。…すると奴らは動きを止めて一瞬だけそちらに集中した。

…今だ！

リーダー格の奴に思い切りドロップキック。後ろにいた奴も巻き込んで机にぶつかった。

「…のやろっ！」

奴らの1人が何処からか警棒を取り出して来て頭を思いつきり殴られて床に沈む。頭が割れそうで視界が赤い。

「おい、芳樹！…らあ！」

翔一は近くにいた奴を沈めてた。幸平は何時の間にか真琴さんを助けてた。

回りのクラスメイトの1人が先生を呼んでくる！と叫んで走って行った。

奴らが翔一と幸平によって沈められた瞬間、安心して意識を手放した。

最後見た映像は穂奈美が何かを叫んでる姿だった。

Good Afternoon! - - - 4

目が覚めるとカーテンに仕切られた部屋：保健室かな？多分、保健室にいた。病室ではなさそうだ。

体を起こそうとすると頭がズキンと痛んだ。

触れてみるとグルグル巻かれた包帯。ああ、そうか。警棒で殴られたんだっけ？ベッドから降りてカーテンを開けると妙子先生が事務をしてたらしい。今は顔を上げてこっちを見てる。

「お、坂上起きたな。よく来るよなあ…」

「…頭は脳震盪ですか？」

「まあそつだ。命に別状無いから安心しろよ」

「助かります」

ぺこりとお辞儀をするととりあえず教室に帰ろうとする。だが頭を殴られた後遺症で歩くのがおぼつかない。

「あ、ちよつと待ってろ。もう少しで見舞いが来るから」

「へ？」

「だから見舞いだ。さっきから何人も来てるぞ？たつく、保健室に留まっていれば良いものを…」

多分あいづらだろうが…確かにそうだな。何で保健室に待機してないんだろう？

まもなく穂奈美がなってきた。俺を見た途端頭は大丈夫かやら体に異常はないかとかフラフラしないかとか…

「ちよつと！お前は母親か？！」

「だって！」

俺が穂奈美の大丈夫かコールに耐えられなくなり声を張り上げると穂奈美も遮った。目尻には涙が溜まってる。

「だって…目の前で倒れるんだもん…あた、頭を打たれた…から、何かあったら、どうしようって思ってた！」

「あー…」

うん、心配だったのは伝わった。ただそんなに泣きながら言つので涙を拭き取りながら話しかける。

「ほら泣くな？俺は大丈夫何だしさ」

「うん、良かった」

ぎゅっと抱きついて来た。背中に腕が回され頭を俺の胸元に当ててきた。

ち、ちよつと！

「ちょ、穂奈美さん?!」

「いいじゃない、心配だったんだよ？」

クイツとその状態で頭だけ上げたから上目で俺を見てきて…うわあ！真面目に可愛いとか思ってしまった。

ただ、ようやく目の前の現実を追いついたので頭を撫でてやる。

「まあ…心配してくれてありがとう」

「ん」

目を細めて返事をした。嫌なのかな…？やめとくか。

やめると穂奈美はこんな事を言ってきた。

「お願い、もっと」

「へっ？」

もつとは多分じゃなく確実に頭を撫でると言う事だろうか。
まあいいけど…撫で撫で。

「何かね、気持ちいい」

「そっか」

お互い暖かさを感じあっていると俺はふと思った。ここは…保健室だよな。じゃあ妙子先生がいるわけで…

「よう、そのままベッドにダイブとか許さんぞ？」

「いぐっ」

下品なセリフと表情でいつてくる妙子先生。穂奈美もその存在によやく気づいたようだ。

「あ、妙子先生。い、いつからいたんですか？」

「最初から居たよ！お前らが異空間作る前からずっといたから！」

涙目の妙子先生。大人げない、つか、大人気なさすぎる。ただの子供だ。

「ん…じゃあカメラで撮りながらやるか私を混ぜてするならベッド貸してやるっ」

「後ろの選択肢は何ですか？」

「うっさい！私だって彼氏が欲しいんじゃない！」

「えー…ん？」

気がつかなかったがこの会話は俺と穂奈美が恋仲だという前提で話されてないだろうか？ちよっと聞いてみよう。

「あのー…俺ら付き合ってますんよ？」

「は、嘘だろう？さっきから生徒間ででお前らの事をカップルだの何だの言ってるぞ？」

「…はあ？」

何の事だか分からない…どうしてそんな噂が？仲が良いとかそれならまだしも恋人？

「あ」

「どうした、穂奈美？」

穂奈美は何かに気がついたらしい。懇意丁寧に教えてくれ。

「多分ね、昼休みの私の言葉が原因だと思うよ」

「はっ？…ああ」

確かこっちにこいとかわけわからなくなってる時に奴らに向かって私の最高の彼氏だとか叫んでたよな…

「ああ、最高の彼氏なんだっけ、俺は」

「んなわけあるか、バカ。最高の親友よ」

「あれま残念」

最後のは冗談だけど最高の親友…男女の友情ってやつか？…良いね。そっいうの好きだよ。

「はいはい、良いから帰りなさい。説明は穂奈美がしてくれたいから面倒な事後処理はないから安心しな」

「ん、はい。ありがとうございます。失礼しました」

「ああ、じゃあな。…ツチ、隠し撮りで一儲け!」

無視する事に決定。

俺は教室に向かう事にした。幸平達は帰ってもらったらしい。曰く『私の責任だから!』らしい。ありがとうございますの意を込めて頭を撫でると気持ち良さそうに目を細めた。

…やばい、俺もクセになりかけてる…

一緒に帰るからと言って教室に入る。散らかされてたはずの教室は綺麗に片付いていた。

鞆を取り廊下に出る。穂奈美の教室を除くと…着替えてた。

俺は慌ててそっぽを向く。

さっきまで忘れてたんだけどそういや少しだけ破けてるのを思い出した。…黒…

「今、覗いたでしょ?」

「うわあ!」

肩をがっしり掴まれて驚く。見るとジト目の穂奈美さん。

「今、見たよねえ?多分、下着も見れたんじゃないかしら?」

「み、見てないよ!」

「じゃあ、さっき黒とか言ってたのは何だったのかしら?」

「それは…」

言葉が詰まる。どう返したら良いものか…ああ！

「今日のラッキーカラーだったんだ」

「占いかしら？」

「ああ」

とりあえず誤魔化した。良い感じに流せた気がする。

「今日は珍しく赤なのよ」

「え、黒くなかつ…あ」

「やっぱり見たのね！私の純情返して！私の純潔を返して！」

「おい…」

「良かったねえ、私の下着が黒で。ラッキーカラーなんでしょ？運も上がったし目の保養にもなったから良かったね、このスケベ！」

プリプリ怒ったふりをして帰った。というのも笑いながら言葉を発していたのだ。

ちよっとおかしくなっただけそのままにしていた。

「こら、帰るぞ。芳樹の家で夕飯を作るから」

「いや、何で？」

「私の所為で怪我したんだからそのくらいさせてよ」

帰り道、俺は穂奈美の自宅訪問を柔らかく拒否する事をずっとしていた。

とりあえず、ファーストフードを奢ってもらった事に収束した。

女の子が男の子の家に簡単にくるものじゃありません！

ファーストフードを食べて家に帰る。とりあえず、不安だと言つ事を隠して穂奈美の家に送った。

「また明日ね、芳樹。頭また怪我しないでね？」

「怪我したら泣いてくれるか？」

「ば、バカ！誰が泣くか！」

本日最後の軽口。いや、最後のは照れ隠しかな？

「Good Afternoon」

「サヨウナラ…ね？」

「ああ、また明日」

「バイバイ」

手を振って別れる。

帰ったら看病御礼に何か作ってやるかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3897y/>

少年少女のソノリティ

2011年11月27日08時49分発行